

# 子どもの力を信頼する保育の探究

## —年長児のお泊まり会の新たな取り組み—

大友菜津子・小田 進一

**抄録:**1年間の保育の見直しを考える中で、幼稚園教育要領の至るところに記されてある「子ども主体」という保育を保障することの検討を課題とし、自身の保育を振り返ると様々な場面において子どもが本来持っている力を発揮できない保育を行っていた事に気が付いた。

この状況を打開すべく、1年間の保育目標に「子どもの力を信じよう」と定め、これまでの保育に固執せずに新たな取り組みを始めた。

**キーワード:**子どもへの信頼、年長児の自覚的育ち、行事の見直し

### 1. はじめに（保育・改善に向けて）

北海道文教大学附属幼稚園は、札幌市南区に位置し、開園50年を迎える定員80名の小規模の幼稚園である。当地域における幼児期の教育を先駆的に担い保護者からの信頼を築いて来た。近年の保育は、「子ども自身が自己発揮し、日々の生活の中で、自らの育ちを実感できることを目指して実践に取り組んで来た。幼稚園教育要領の理解を深めるなどの保育の見直しも行い、具体的には異年齢たて割り保育や園内外の保育環境改善を実施し、日々の保育追究に努めている。その一環としての実践研究である。

これまで、子どものために良かれと思っていた関わりは過保護なものであった事に気が付いた。子ども達の活動や困りにすぐ介入し自分から発信しようとする気持ちを摘んでしまう。友達同士のトラブルの際に、自分達で解決する努力を認めることができない。身支度をしている傍で一つ一つの荷物を確認し、頑張ろうとする気持ちにならない状況にしていた。保育者の予測に合わせようと急かし、自分なりに取り組んでいるにも関わらず、その行動を促す声かけを行い子どものペースを大事にしないなど「子どもたちのために」と思っていた何気ない関わりが子どもの育ちの妨げになっていたと気づいた。何よりも、常に子どもの傍にすることで、子どもの世界に入り込み、大人に頼りすぎる子どもにさせていた。

保育者として、子どもが持っている力を十分に発揮できない状況を作っていた事に反省し『声を聴く・行動を待つ・見取る・関わりの必要性・立ち位置』に留意し保育を行おうと、保育テーマに『子どもの力を信じよう』と定めた。「子ども主体の活動を保証する」事を目指すため、これまでの保育に固執せず新たな取り組みを行うことにした。

### 2. 行事の見直し

新たな取り組みを始めたことで、日常の生活の中でお互いの気持ちを伝えあい、活動に向けて取り組もうとする姿が見られてきたことから、次の段階ということで、行事のあり方の再検討を、お泊り会について行った。

お泊り会のねらい・留意点であるが『自信と達成感を養う』『年長児としての自覚を持ち、自立につなげる』ことに重きをおいた。6月、活動を始める際に保育者側からは話はせず、子どもからの発信を待った。それには、4月の集まりの中で「1年間で楽しみにしていること」を話し合った時に「お泊り会」という言葉がたくさん聞かれていたことから、自分たちで気がついて取り組んでほしい、そのほうが子ども主体になれるのではないかと、そしてそれがきっとできるはずと信じて、待つことにした。

#### お泊り会の4つのねらい

- 1 通常の保育では経験できないことに興味を持って取り組む。
- 2 家庭から離れて過ごすことで自信と達成感を養う。
- 3 友達と協力しながら年長としての自覚を持ち、自立につなげる。
- 4 公共のルールやマナーを守り、友達と協力して楽しく安全に過ごす。

### 3.1 お泊り会の見直しと子どもの成長（保育の位置付け）

個々の子どもの自主的な参加の中で、それぞれの関わりを見取り、子ども自身の満足に結びつくためには、職員間の共通理解が最重要である。これまでのお泊り会では、常に子どもの傍に保育者が何人もいて、子どもが失敗しないように声をかけ、すぐに手をかけ、不安がないように対応していた。何よりの問題は、いつでも頼れる状況を作っていたことだった。今年度のお泊り会のねらいに向かうため、園外保育以外は担任と補助の2名と、通常保育と同じ人員にすること、園外で関わる保育者は基本見守りの姿勢でいること、身辺処理は子ども達に任せること、そして何よりも子どもたち同士で考えあう、相談できる環境を確保することを職員間で共有した。

「保育を変える」ことは簡単なものではない。まして、経験年数があれば、これまでの保育での子どもの育ちを見ており、新たな取り組みにデメリットも感じる部分もあった。本当にできるのだろうか、安全面への配慮は大丈夫なのか、子どもの育ちにはやはり大人が傍にいるべきではないだろうか、保育者自身も子どもとの思い出を作りたいなどとの異論を受け止めつつ「子どもの力を信じよう」の保育テーマや、お泊り会のねらいの「自立・自覚」を達成するために、これまでの保育者の関わり方や子どもの姿を話し、納得してもらった。

#### 3.2.1 取り組み後の子どもの姿と保育者の姿勢

新たな取り組み後、すぐにこれまでと異なる子どもの姿が見られてきた。

6月、子ども達からお泊り会に向けての発信があり、すぐに活動をスタートしたが、グループでの話し合いがとても難しかった。積極的に話を進めようとする子・みんなで話をしようとする子・自分の意見がなかなか言えない子・なんとなくその場にいる子と個人差が大きく見られ、話し合いがまとまらず、進まない姿が見られていた。

子どもの力を信じようと思ったものの、やはり保育者からの個別の説明が必要な子がいるのではないかと、どうしたらこの差を縮められるだろうか、何とかみんなで話し合いを進めてほしい！という思いがあり、この状況をどう思うか問い、子ども達と一緒に考えることにした。子ども達自身も話し合いが難しく、どうしてよいのかがわからないようだった。「話をきいてくれない」「違う話をはじめちゃ

う」「ふざける」「話がわかんない」等、それぞれの思いが出てきた。すると「わからない子にはちゃんと教えてあげる」「相手の話をちゃんと聞く」「話し合いの途中でいなくなる」等、それぞれの思いがまた出てきた。

これまでであれば、この課題が見えた時点で、子ども達にはこれ以上話し合いは難しいだろう、何を話しているかわからない子が出てきたから、保育者が助けてあげなければという思いで話し合いに介入していた。しかし、それぞれが意見を言えたり、考えながら話し合う姿が多く見られるようになってきているのだから、きっと話をまとめようと何か発信があるはずと、話が途中で途切れても「もう少し」と信じて待った事で、子ども達自身が解決策を見出すようになっていった。活動が進むにつれて「みんな少しずつわかっていくだろう、みんなが同じじゃなくてもよい」という子どもの意見から、一人ひとりのペースを大事にする事を保育者自身が学んだ事で、より一層『子どもの力を信じよう』という姿勢が明確になった。

### 3.2.2 予想を超えた姿を見せる子ども達

新たな取り組みから、保育者の予想を超える姿を見せる子ども達の姿はどこからくるのか考えた時、それはこれまでの経験が子ども達に大きな自信を与えていたからだと感じられた。また、話し合いで大きく変わった点は、お互いを思いやる姿がこれまで以上に見られるようになったこと、自分で考えを持って相手に伝えようとするということである。さらに話し合いを重ねた子ども達は「自分の意見を聞いてもらえるうれしさ」「自分で考えて決めることの楽しさ」を感じながら活動を進めていった。

夕・朝食の買い物を自分たちで行うことにした。そこで、事前に買い物リストをグループ毎に作成し子ども達に渡した。買い物の際は園外活動でもあり、職員の人数を増やそうか迷ったが、お店に向き、この保育の主旨を伝えて協力いただけたことで、5グループ26名に対して2名の職員とまさしく「自分達での買い物」という状況にした。買う物を間違えたり、買えなかったり、困って保育者を探したりするだろうという保育者の予想に反し、買い物リストと照らし合わせながら品物をカゴに入れ、レジに向かう前に買い忘れがないか確かめる。届かない物や場所がわからない物に関しては自分達でお店の人に聞いたりしながら自分達で買い物をすすめていた。最後の会計は保育者が行おうと思っていた所に、「先生、お金ちょうだい？」と自分達で支払いまでしようとする姿に驚いた。家庭で経験したことがあると子を筆頭にグループで協力して「やってみたい！」というこれまでの活動で積み重なった自信からくる姿であった。

### 3.2.3 子ども達自身の意識の高まり

これまでの体験を通して感じたことを子ども達同士が話している姿があり、その内容をみんなでまとめ、ねらいができた。

- 自分のことは自分で頑張ります！
- 困ったときはまわりのお友達に聞こう！！
- 困っている子がいたら「大丈夫？自分でできる？」と声をかけてあげよう！！
- 大きな声になったら「落ち着いて」と声をかけよう！！

これらは活動中にそれぞれが体験したことから出てきたねらいである。これまでの活動により自分でできることが増えた事に気が付き、「何でもできるし、頑張れる！」という自信の表れであったり、

困ってもお友達と相談する事で答えを見つけてきた子ども達は、どうしようもなくなったら先生が助けてくれるからまずは自分達で考えようと前向きな気持ちを持てるようになっていたり、自分でやろうとしていたことを何も言わずに手伝われた事が嫌だったから、まずは声をかけようとお互いの気持ちを考える行動をとろうとした。静かにして！うるさいよ！という攻撃的な言い方ではなく、自分が言われても嫌な気持ちにならない言葉を考え、自分達で声を掛け合おうと決めた。

自分達で進めてきたお泊まり会がいよいよ近づく中で、これまでの活動でも取り組んできたことを、もう一度友達と確認し合うことで当日を楽しみにする気持ちが高まっていった。

### 3.3 成長した子どもの姿

お泊り会で達成感や満足感を得た子ども達は、その後、様々な場面で成長した姿を見せた。

行事に積極的に取り組む中で、保育者が提案しなくとも自分たちで話し合いを始めるようになった。何か困り事があると友達に助けを求め、それを自分事として悩む姿があった。うまくいかない事に向き合い、どうしたら良いかみんなで考え、助けあいながら何度も挑戦した。

個の育ちとしても、それまでは自分の意見が曲げられず、友達関係において一定の距離ができていた子が、相手の意見に耳を傾けるようになったことで友達との仲が深まった。活動時、その場にいるだけで緊張していた子が意見を受け入れてもらえた経験から、全体の中で自分の意見を発表するようになった。

年中少児のお手伝いをする時も「大丈夫？自分でできる？」と声をかけ、傍にいて見守り、相手の思いに寄り添う姿が見られた。どの場面においても互いの認め合いが深まる姿である。

## 4. 実践の報告に触れた学生の反応から学ぶ

保育者・教育者を目指す学生に向けて、お泊り会を経験した子どもの心の育ちと題し、年長児の4月の姿からお泊り会の取り組み、そして当日の様子について講話を行った。

学生の感想、意見を取りまとめたところ、子どもの力は自分たちの想像以上であり、それに気づくことで子どもにとって必要な保育者の役割に気づきがあったようだ。

調査対象・日時

2018年8月10日 北海道文教大学子ども発達学科1年生 90人

2019年1月11日 札幌国際大学短期大学部保育学科2年生 56人

2019年8月20日 北海道文教大学子ども発達学科1年生 79人 合計 225名

主なカテゴリーと内容

A 子どもの育ちに必要な環境、保育者の関わりについて感じたこと

- 1・放任するのではなく必要な場面では子どもが気づけるようなサポート、子ども一人ひとりに必要な関わりが大切 (同 28)
- 2・子ども達が自由に考えて活動できる環境、遊びを通した学びが重要 (同 23)
- 3・保護者や地域の人との信頼関係を築き、目指している保育、それに必要な配慮の共通理解に努める事が重要 (同 22)
- 4・大人の考えで子どもの「やってみよう」とい気持ちを止めない、大切にする (同 21)

- 5・ きっとこうだろうと決めつけず子どもの可能性を信じて待つこと、見守る事が大切 (同 17)
- 6・ 環境を整えるために様々な場面で (裏方のような) 準備が欠かせない (同 14)
- 7・ 大人のペースではなく、子どものペースを大事にする (同 12)
- 8・ 大人が全てを決めるのではなく、子どもの気持ちや感性を尊重することが大切 (同意見 12)
- 9・ 子どもの行うことに否定をしない (同 4)

☆ A のまとめ

子どもが自由に考えて活動する中で「やってみよう」という気持ちを尊重し、直接的にかかわるのではなく、周りとの共通理解を図り、環境を整えた上で子どもの可能性を信じ、見守ることが重要だと学生が感じている。68%

**B 活動から見えた子どもの成長について**

- 1・ 主体的に挑戦や経験をし、失敗を乗り越え、達成感から自己肯定感が芽生え、さらなる意欲になると感じた (同 30)
- 2・ 子ども同士で話し合ったり助け合ったりすることでお互いの個性に気づき、認め合い、助け合う事で思いやりの心が育ち自信につながると感じた (同 24)
- 3・ 自分で考えて決めて行動する事が責任感等大きな成長につながると学んだ (同 22)
- 4・ 待つこと、見守ることで、子どもの自立、挑戦する力が高まると思った (同 19)
- 5・ 様々な経験をする事で判断力や思考力が生まれ理解につながるのだと感じた (同 15)
- 6・ 大人が距離をおくことで、自分たちで解決しようという気持ちが成長していた (同 7)
- 7・ 日常生活 (年中少の手伝い、年長の活動) の積み重ねた自信もこの活動で出ていると感じた (同 4)
- 8・ 子どもの声を聴くことで発信力があがると感じた (同 3)

☆ B のまとめ

主体的に考えて取り組む事で思考力、判断力を伸ばしながら自己決定し、責任感が生まれる。失敗を乗り越えた時には達成感から自己肯定感が芽生え、次なる挑戦への意欲が高まっていく。また、友達と関わることで他者の気持ちに気づき、互いの認め合いから、思いやりの心が育つ。そして日常的にこのような経験を子ども達は自信を積み重ねていくのだと成長過程に重要と考えられる事に注目が集まった。

**C 子どもの想像以上の姿について**

- 1・ 可能性や本来持っている力、大人の介入がなくても「できること」の多さに驚いた (同 48)
- 2・ 様々な事を考えて解決策を見出せることに驚き、たくましさを感じた (同 14)
- 3・ 子ども達が中心となって計画を立て進めることに驚いた (同 14)
- 4・ いつも保育者に頼るのではなく、お店の方に聞くという判断ができることに驚いた (同 7)
- 5・ 話や写真から子ども達の成長の早さ、表情の変化に驚いた (同 6)
- 6・ 周りの大人が行っていることをよく見ていて獲得している

☆ C のまとめ

大人の手を借りずとも、子ども中心で考えて計画を立て、状況に合った判断をしたり、問題点に気づき解決策を見いだしたりと多くの事ができるという発見があったようだ。そして、大人の予測を超えて、1日で表情を変化させる子どもの成長、可能性や本来持っている力に対して多くの驚きがあった。

#### D これまでの考えや保育者に必要だと感じていたこと改善したいことについて

- 1・子ども主体はどれほど大切か理解した。言うのは簡単だが、放任にならないよう、実践はとても難しい、大変と感じた（同 36）
- 2・「きっこうだろう」「よかれと思って」とい思いからつい手伝い、声かけ、困っていたら助けていた。それが子どもの成長の妨げになっていると感じた（同 30）
- 3・活動は保育者が決め、指示し、直接的に関わり、危険なことは保育者が行っていると思っていた（同 22）
- 4・大人の考えで物事を進めることは簡単であるが子どもの成長にはならない（同 20）
- 5・子ども達に任せることに不安を感じたが全てにおいてそうではないと感じた（同 14）
- 6・ねらい、留意点の重要性を感じた（同 8）
- 7・いつもそばにいて援助する事が保育者の役割だと思っていたが過保護だと気づいた（同 6）
- 8・子どもと相談する事で保育者の学びにもなると感じた（同 2）

#### ☆Dのまとめ

子どもには危険だろうと予測して保育者が計画立てる事は簡単で安全である。そして失敗や危険がないよう常にそばで指示をする事が保育者の役割だと思っていたことが、子どもの成長を妨げているのではないか。だとすると、保育はとても難しく大変だと感じる。しかし、本来子どもが持っている力が発揮されるようなねらいと留意点をしっかり立てる事で子ども主体の保育が実践され、このことは子どもにとっても保育者にとっても学びになると感じている。

#### E 今後、自身の保育に生かしたいと思うことについて

- 1・一人ひとりを知り、話し合い、助け合いを大切に子どもの力を信じる保育者になりたい（同 9）
- 2・子どもの持っている力や変化に気づける保育者になりたい（同 4）
- 3・子どもにとって良いことは何かを考えられるサポートできる保育者になりたい（同 4）
- 4・自ら学ぶ力を持てるような子ども達を育てたい（同 3）
- 5・過保護にならない保育を行いたい（同 2）
- 6・子ども主体の保育がどういうことが感じられ自分も実践したい（同 2）
- 7・日々の振り返りを大切にしたいと思った。

#### ☆Eのまとめ

一人ひとりを知ることで、変化に気づきながら、子どもの成長をサポートできる保育者でありたい。過保護な保育にならないよう、子ども主体の保育を実践するため日々の振り返りが大切と感じたようだ。

これまで見てきたように、学生は自身の考えに変化を意識している。それは、予想以上の子どもの姿を見たり、子どもにとって本当に必要な保育者の役割を知り、目指すものが明確になったりという多様な発見があった。

保育者、教育者を目指し、理論を中心に学ぶ学生が「子ども主体を目指しての保育実践」を知ることにより、自身の考えを深め、新たな発見をする姿から、現場の保育者も理論と実践の整合性を図りながら日々の保育を行う事が重要性を気付かされた。また学生の意見から他者が予測する子どもの姿を知ることで、保育者の専門性や子ども主体と放任の境界線など筆者にとっての新たな課題が見えて

きた。今後、学びも深めたい。

## 5. まとめ

「子ども主体の保育」と様々な場面で言われる中で、これまでは筆者自身もこのことを自分なりに理解して保育を行っているつもりでいた。しかし今までの保育を振り返ってみると、これまで過保護な保育と思える場面が多くあった事に気づき、今までの保育を大きく変化させる必要性を強く意識した。

『子どもの声を聴き・距離に気をつけて見守り・行動を待つ・子どもに任せる』事を常に考えて、一つ一つの関わりを大事にする保育を心がけた。これは理解していても実際に行おうとすると、とても難しく、我慢が必要な事であった。「こどもはきっとこうだろう」というような、その子の事実に向き合わない『保育者の勝手な予測』が優先する保育になりがちである。

今回の実践で保育者の想像を超える子どもの姿が現れ、子ども達は数日のうちに自立につながる行動を行い、年長児として自覚的に育っていった。その姿に驚くと共に、自分自身の保育に自信が持てたような気がした。『子どもの力を信じる』保育ができた時、子ども達の育ちは無限であると感じるようになっている自己の意識の変化に驚く。これからも子どもを信じられる保育者であり続けるためには「保育を常に振り返る事」に力を尽くしていきたい。

## 資料1 家庭配布 お泊り会の案内

お泊り会について	
<p>今年度のお泊り会は「こどもの自立！」を目指す活動にしたいと考えております。</p> <p>これまで、お泊り会当日は全ての活動に保育者が携わっていましたが、今年度のこどもの姿とねらいをしっかりととらえ、保育者の動きを統一してご協力いただけたらと思います。どうぞよろしくお願い致します。</p>	
登園	玄関にて保護者対応 りみこ T (はなえ T) 他職員は職員室にて出発準備 こども受け入れホール入り口で指示 なつこ ばなな組で排泄の声かけ りょうこ T (2階トイレ)
朝の会	動物園引率→職員室にて出発準備・健康調査書の特記事項の確認 園職員 →ホール設定・健康調査書特記事項の確認 ※特記事項は1枚の紙にまとめて記入
出発時	動物園引率→タクシー乗車 園職員→虫よけスプレー・お見送り(芝生にて) カレーづくり 2階トイレの掃除
移動時	切符購入時 そばにいて対応(一般の方の迷惑にならないよう) 乗り換え時 危険がないよう見守り 円山動物園まで “ 昼食時 こどもたちが昼食準備をする姿を見守る 見学时 危険がないよう見守り 基本的にはこどもたちで解決するよう見守る おやつ購入に関しては・お金を渡す・購入可能か判断をお手伝い 川沿湯 着脱に関しては一般の方の迷惑にならないよう場所の確保 身体洗い仕上げ
幼稚園に戻る	引率職員→移動時、銭湯の片付け 園職員→移動時、銭湯の片付け クッキング : 引率職員→こどもたちの姿、記録作成 園職員→各グループ写真整理 ※クッキング終了後 台所に下げた物を洗う
夕食準備	: 記録作成 金銭処理 夕食 : 一緒に食べる (食後は職員室にて各自続き)
寝袋準備 花火 就寝準備	なつこ・りょうこ T 引率 写真整理・記録作成 就寝時 担当ではない時間は 職員室・ばなな・めろんでお休みください。
起床	: 朝食準備(りみこ T・ちひろ T (はなえ T)) ホール準備(だいご T・はなえ T) 帰りの会 : 片付け 洗濯
朝食	: バイキングの配膳 片付け 降園時 : 保育室・ホール トイレ掃除

## 資料2 お泊り会の流れ

### お泊り会の流れ 前日～7月13日(金)

時間	内容・子どもの予想される姿	留意点
前日	<b>ホールへ荷物移動</b> これまでの準備活動を振り返り、翌日からの活動に期待が持てるよう友達や保育者と話す	お風呂セット・寝袋はホールにこどもたち自身で準備しておく
当日 9:00	<b>登園</b> 持参した荷物の整理(ホール) 友達同士で協力 排泄後2階保育室に集まる	玄関保護者対応→1名 ホール入口→1名 2階→1名 職員室→他職員

時間	内容・子どもの予想される姿	留意点
9:10	<b>朝の会</b> 挨拶, 出欠確認, 本日の流れの確認	2日間の流れ, 子ども達自信が決めたねらいを確認し出発
9:25	<b>園バス乗車</b> リュックとお風呂セットを持つ 友達同士で忘れ物がないか確認しあう	<b>水分補給</b> 場所を考えて各グループ判断で適時行う・必要があれば声かけ
9:40	<b>駅到着 切符購入</b> ひとりずつ切符購入 一人ずつ改札を通る	<b>切符購入</b> 届かないという発信には介助 購入方法については友達同士で解決できるよう見守り 券売機は他の利用者状況により担任が使用の判断
10:26	<b>地下鉄乗車</b> 大通駅到着 乗り継ぎ 友達同士で声をかけあい安全に行動する	<b>下車・乗り換え</b> 危険と判断した場合は声かけ
10:35	<b>円山公園駅到着</b> 徒歩で動物園へ 沢側の木陰を通る	<b>昼食準備</b> 困りの発信があった場合友達同士で解決できるよう促す
11:10	<b>円山動物園到着</b>	<b>見学中</b> うしろから見守り・写真撮影
12:10	<b>サル山前看板にて集合写真撮影</b> 全員で昼食 友達同士で助け合う <b>グループで見学開始</b> 計画を基に協力して安全に楽しく過ごす <b>正門集合 園バス乗車</b>	トラブルの際はすぐ介入せず子どもに任せ、子どもから困りの発信があった場合のみ対応
15:00	<b>銭湯へ向けてバス出発</b>	
15:40	<b>銭湯到着 (川沿湯)</b> 各自入浴 状況にあった行動ができるよう友達同士で声をかけあう上がった子から水分補給	<b>脱衣所 (1名) 洗い場 (2名)</b> 他のお客さんの迷惑にならないか状況確認・禁止事項は声かけ
17:10	<b>幼稚園へ出発</b>	
17:25	<b>幼稚園到着</b> 排泄・手洗い・うがい	<b>園到着後の行動・活動確認</b> 到着後見守り
17:40	<b>デザート作り</b> グループ毎にフルーチェを作る 作り方を聞き友達と相談してすすめる 片付けまで自分たちで行う	<b>デザート作り (1名) 写真 (1名)</b> 流れを説明後子どもに任せ見守り 発信があった場合のみ対応
18:10	<b>夕食準備・夕食</b> グループの席を自分たちで確かめて準備をする	<b>準備等の確認</b> 配膳の位置にいて見守り・配膳 職員室で写真整理の職員は一緒に食べて終わり 次第作業に戻る
19:15	<b>寝袋準備</b> 友達としながら準備する	<b>次の活動の確認</b> 困りの発信以外は見守り
19:40	<b>排泄 花火鑑賞準備</b> 明清高校グラウンドへ移動・友達と安全に楽しむ	<b>移動時</b> 危険がないよう見守り
20:00	<b>打ち上げ花火鑑賞</b>	

時間	内容・子どもの予想される姿	留意点
20:20	就寝準備 着替え後歯を磨く（2階保育室） 最終の水分補給を行う 集合写真 20:55には寝袋に入る 絵本読み聞かせ	着替え・就寝準備・就寝 歯磨きの場所を知らせ見守り 1階ホール（1名） 2階保育室（1名）
21:00	就寝 友達と話しをしながら就寝	見守り担当者順次交代（1名） 他職員は保育室等で仮眠

### お泊り会の流れ 7月14日（土）

時間	内容・子どもの予想される姿	留意点
6:15	起床 排泄・着替え・かご片付け・荷物の整理 寝袋を片付ける 友達同士で協力	朝食作り（5:30～）
6:45	体操・ランニング	友達同士で協力する姿を見守る 引率（2名）写真（1名） ホールセッティング（2名）
7:15	朝食準備・朝食・荷物の整理 グループ毎に着席・友達と声をかけあい座る バイキングの方法を知り・友達と楽しく食べる 片付け後、身の回りの荷物を整理する	朝食 バイキングの方法・食後の行動を確認して見守り
8:45	帰りの会 活動を友達と共に振り返り達成感・満足感を味わう	帰りの会 保育室にて子ども達と活動を振り返り、達成感満足感が持てるようすすめる
9:00	降園	

### 文献

「幼稚園教育要領解説」文部科学省

佐伯 胖 他（2013）、「子どもを『人間としてみる』ということ：子どもとともにある保育の原点」

子どもと保育総合研究所

加藤繁美（2012）、「0才～6才心の育ちと対話する保育の本」学研

中坪史典（2015）、「保育を語り合う協働型園内研修のすすめ」

塚本智広（2013）、「子どもに"ではなく"子どもと」かりん社

安達 護（2015）、「子どもに至る、保育者主導保育からのビフォー&アフターと同僚性」ひとなる書房

小田進一 他（2020）、「附属幼稚園における保育実践の見直し」北海道文教大学研究紀要第44号

## 査読に関する申し合せ

(趣旨)

第1条 本学研究報告（『北海道文教大学研究紀要』および『北海道文教大学論集』）に掲載する論文の質の向上を計るため査読を行うこととする。

(基準)

第2条 査読は総説および原著論文について以下の基準に基づいて行う。

- ①論文の研究内容が該当分野の知見の蓄積に貢献する学術的価値の高いものであること。
- ②研究の手続きが妥当で、社会的、倫理的配慮が十分になされていること。
- ③論文の構成および論述が適切で、論理に飛躍がなく説得的であること。

(審査)

第3条 査読者は、審査の基準に即して審査を行い、その結果を下記のいずれに該当するかを編集委員会に報告する。

- A：基本的にそのまま掲載可
- B：構成および論述を修正した上で掲載可
- C：構成および論述を修正し、再査読（1回目の査読時のみ選択可能）
- D：不可

(査読者)

第4条 査読者は、該当分野に明るく、審査の能力を有するもの2名を当てる。学外者に委託することも可とする。

(手続き)

第5条 査読は以下の手続きによって行う。

- ①査読を希望する研究者は、通常原稿締め切りの2ヵ月前をめぐりに論文を編集委員会に提出する。
- ②編集委員会は、査読者を委嘱し、審査を委託する。
- ③編集委員会は、審査結果の報告を受けて、その後の取り扱いを以下の要領で決定する。
  - i) AA（査読者2名ともAと判定（以下同趣旨）の場合は、基本的に掲載可とする。
  - ii) ABないしBBの場合は、指摘にもとづき修正を指示し、修正原稿と査読者へのレスポンスレターの提出を求める。修正が指示に沿って適切に行われているかを編集委員会が判断し掲載の可否を判断する。
  - iii) AC・BCないしCCの場合は、指摘に基づき修正を指示する。修正原稿と査読者へのレスポンスレターを査読者に送付し、再査読を委託する。再査読の判定に従い、i・ii・ivのいずれかの対応を実施する。
  - iv) 査読者（1人でも）がDと判断したものは、査読論文としては掲載しない。

(証明)

第6条 査読により掲載可となった論文については、編集上その旨を明示する。

附則

- 1 本申し合わせの施行期日は2015年6月18日とする。
- 2 2018年6月13日改正